

令和7年度 病害虫発生情報 第6号

令和8年3月18日

千葉県農林総合研究センター長

トマト灰色かび病の多発生に注意

1 発生状況等

(1) 3月上旬に行った冬春トマト10地点（旭市、一宮町）の巡回調査において、灰色かび病の発病株率は13.6%（平年値3.00%）（図1）、発病果率は0.25%（同0.02%）（図2）といずれも過去10年と比較して最も高かった。2月下旬の降水及び高温による夜間の暖房時間減少が多湿の要因となり、本病の発生を助長したと推察される。

例年では、4月上旬に発病が増加するが、本年は3月上旬に平年の4月上旬並みの発病株率および発病果率であり（図1、2）、今後の発病の増加に注意が必要である。

(2) 3月12日に発表された気象庁の1か月予報によると、関東甲信地方の気温は高い、降水量は平年並みか少ない見込みである。例年3月以降は2月までと比べ気温が高く、降水量が多いため、曇雨天が続く場合や、夜温が暖房設定温度より高く、暖房機が稼働しない場合等による多湿に注意が必要である。

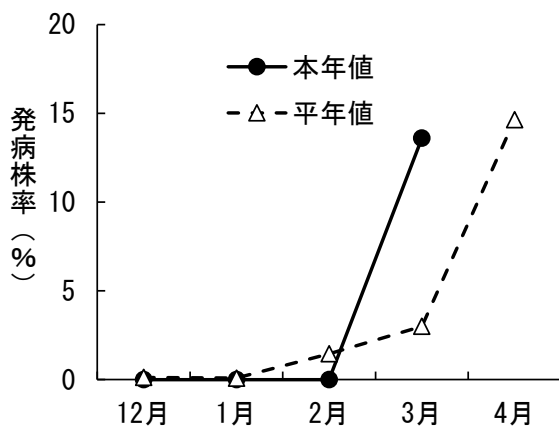


図1 トマト灰色かび病発病株率の推移
（毎月上旬調査）

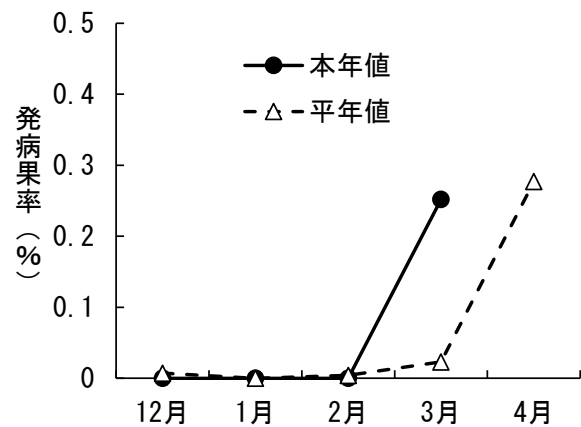


図2 トマト灰色かび病発病果率の推移
（毎月上旬調査）

2 主な発生部位と症状および感染好適条件

枯れた下葉や葉先（写真1）、摘葉・摘芽後の傷口（写真2）、開花後の花卉等から発生する。病斑部には灰色のかびが密生し、軟らかく腐る。茎や葉柄に発生した場合は、病斑部より先は萎れて枯死する。果実に発生した場合、水浸状に腐る（写真3）。

本病が多発し、菌密度が高いと果実に2~5mm程度の白色リング状の病斑（ゴーストスポット）をつくる（写真4）。この果実は腐敗しないが、商品性は低下する。

灰色かび病菌の生育温度は2~31℃、適温は23℃前後、分生子は93%以上の相対湿度で発芽し、感染には95%以上の相対湿度が5時間必要とされている。開花直後の花卉や葉先枯れ部位などから感染することが多く、果実や茎葉に発病が進展すると被害が大きくなる。



写真1 葉先の病斑



写真2 摘葉後の傷口の病斑



写真3 果実の病斑
(水浸状の腐敗)



写真4 果実の病斑
(ゴーストスポット)

3 防除対策

(1) 耕種的・物理的防除

- 1) 多湿条件下で発生しやすいことから、暖房、送風、換気等により、施設内の湿度を低く保つ。
- 2) 過繁茂にならないよう、適切な施肥管理を行い、風通しを良くするために適宜摘葉を行う。
- 3) 傷口が早く乾くよう、気象予報等を参考に管理作業は晴天が続く時に行う。摘葉や摘芽は基部で切断する。
- 4) 発病していなくても、しぼんだ花卉や枯死した部位は発生源となるため、摘除する。
- 5) 病斑部は早めに摘除し、ほ場外に持ち出して適切に処分する。

(2) 薬剤防除

- 1) 発生予察情報を参考に、ほ場の見回りなどによる発病株の早期発見に努め、発生初期に薬剤散布などを実施する。
- 2) 葉裏や下位葉にも十分かかるよう、丁寧に薬剤散布する。
- 3) 薬剤散布は、晴れた日の午前中に行う。また、曇雨天が続いて薬液が乾きにくい場合には、くん煙剤の使用や常温煙霧等も有効である。
- 4) 耐性菌を生じやすいので、FRACコード（殺菌剤の作用機構の分類）が異なる薬剤をローテーションで選択する。

表 トマト、ミニトマトにおける灰色かび病に対する主な防除薬剤（令和8年3月4日現在）

FRAC コード※1	薬剤名※2	使用 方法	希釈倍数・使用量		使用時期	本剤の使用回数	
			トマト	ミニトマト		トマト	ミニトマト
BM02	ボトキラー水和 剤※3	ダクト 内投入	7.5~15g /10a/日	10~15g /10a/日	発病前~ 発病初期	-	
		散布	1,000倍		発病前~ 発病初期	-	
		常温 煙霧	300g/10a		発病前~ 発病初期	-	
NC	ハーモメイト水 溶剤	散布	800倍		収穫前日まで	-	
M5	ダコニール10 00	散布	1,000倍		収穫前日まで	4回以内	2回以内
M7	ベルコートフロ アブル	散布	2,000~ 4,000倍	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	2回以内
2	ロブラールくん 煙剤	くん煙	※4		収穫前日まで	3回以内	
7	アフェットフロ アブル	散布	2,000倍		収穫前日まで	3回以内	
9	フルピカフロア ブル	散布	2,000~3,000倍		収穫前日まで	4回以内	
11	ファンタジスタ 顆粒水和剤	散布	2,000~3,000倍		収穫前日まで	3回以内	
12	セイビアーフロ アブル20	散布	1,000~1,500倍		収穫前日まで	3回以内	
17	ピクシオDF	散布	2,000倍		収穫前日まで	4回以内	

※1 FRACコード：殺菌剤の作用機構の分類を表すものである。

※2 薬剤名が異なっても同じ成分を含む農薬があるので、散布前に確認し、同じ成分がある場合、合計使用回数が制限を超えないように注意する。

※3 微生物殺菌剤

※4 くん煙室容積300~400立方メートル(高さ2m、床面積150~200㎡)あたり100g (50g×2個)

注 農薬の使用に当たっては、最新の農薬登録内容を確認し、製品ラベルに記載された使用基準等を守り適正に使用する。

・病害虫発生予察情報は、インターネットでもご覧いただけます。

<https://www.pref.chiba.lg.jp/lab-nourin/nourin/boujo/>

・薬剤の選定については、最新の農薬登録情報を確認してください。

<https://pesticide.maff.go.jp/>

問合せ先

千葉県農林総合研究センター病害虫防除課

〒266-0014 千葉市緑区大金沢町180番地1

TEL 043(291)6077 FAX 043(226)9107

E-mail cafrc-bojo@mz.pref.chiba.lg.jp

